

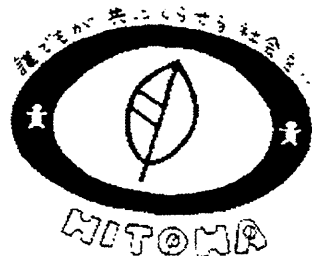
2023年(R5年)



No. 370

# ひとはつうしん

(字:水田 淳也)



(ホムアド) http://hitoha-fukushi.com (マルアド) honbu@hitoha-fukushi.com

社会福祉法人 ひとは福社会

〒739-1203

広島県安芸高田市向原町長田1857番地

TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

## ● 特別寄稿 ●

### 寺尾文尚さんを偲ぶ

安倍元首相「国葬」の日の夜に、30数年来の友人である寺尾さんの逝去の報を受けた。彼は元首相とは対極の人生を歩み、「地の塩」というべき人であった。寺尾さんに初めて会ったときは、似島学園に勤務されていた。私は当時、県立広島女子大学(現・県立広島大学)に務め、実習巡回で訪問したときだった。彼は在職時から向原町で共同作業所作りを始め、似島学園を退職後は利用者・家族と地域住民の要求に応じて、今日の「ひとは」を作り上げた中心人物である。

偶然にも彼の姿を七くなる前に、地元テレビ局のニュースで見た。胎内被爆者の「きのこ会」取材したもので、彼は会員の一人として発言していた。私は広島に赴任して初めて胎内被爆者と出会い、彼らが最も若い被爆者と知った時、核兵器は悪魔の兵器だと強く思った。

寺尾さんの発言は「平和の反対語は何か」と問い、戦争・原爆だけではなく差別や貧困を挙げ、これらを根絶する努力の中でこそ平和は維持されると述べていた。彼の人生は障がい者支援と最年少の被爆者支援にあり、「反暴力」の思想に立脚して、それを生涯にわたって追求した人だと思う。支援と書いたが、彼は障がいのある人を支援の対象というより、大人同士の関係としてとらえていた。矢の的障がいのある人との会話や手紙のやり取りを見ると、お互いに構えたところがなく、仲間同士という印象を持った。障がいという属性に配慮はしながらも、対等平等たらんと生きてきた人物だと思う。

(元県立広島女子大学教授 鈴木 勉)

## ・・・ 続・文尚さんへ届けたい・・・

### ～お酒呑みたかったな～

文尚さん最近会ってないね。今どこにおるん?

文尚さん、本当にいろんな話をしたね。

ふざけた話まで、楽しかった。

ひとつ心残り。1回くらいお酒呑みたかったな。

まあ、ゆっくり休んでください。

お世話になりました。  
(きらら 河野 大輔)

声高く娘の名呼べる文尚さんに  
手を振りたるが最後となりぬ  
(葬儀の日にて古栗絹江)

献花から戻る通路のポケットに  
ハンカチ入れる青年のあり

(三上潤子さんの母)

寺尾さんへ最後の手紙

「寺尾さんへ最後の手紙」  
私がひとはに入った時、プレハブの小さい作業所でした。  
仲間とスタッフあわせて20人もいなくて、車の(部品の)仕事をしていました。時にはみんなで話合いをしたり、ご飯を食べに行ったり、おでかけもしました。  
きくちゃん(障害の重い人)は仕事ができないけど、一人にしないでがんばってこうと話合ってきましたね。  
私は最初のひとはの約束を守っています。あいさつはきちんとして、人の嫌がることはしない。  
文尚さんありがとうございました。星になって、ゆっくり私たちを見ていて下さい。  
(きらら 金羽木さおり) 手紙より一部抜粋

ひ

# 「お祝い」

夜勤明け、誕生日を迎えた朝。この歳になると誕生日も嬉しいものでもないが、家に帰ってもその日、ダンナさんは会社の飲み会。「おめでとう」くらいは言ってもらいたいのが女心。。。そこで、美江さんに「今日誕生日なんよ」と伝えてみた。するととびきりの笑顔で「芳村さん、おめでとう」と言ってもらい大満足。しかし、その後さらや他事業所のスタッフにも「今日、芳村さんの誕生日なんよ」と次々に伝えてくれ、歌までうたってもらい、だんだんと気恥ずかしさが...うれし恥ずかし48歳、思い出に残る誕生日になりました。

(共同ホームひとは 芳村 陽子)

と

は

# 「こんな一面も」

いつも優しい服部さん。ある日クッキーを作る仕事での出来事。右も左も分からず、私は生地を言ってる作業をしていた所「1g 9タインだけど〜」と服部さん。私は「9タあったかな？二重チェックも大事だよ〜」と思い作業をしていました。しかし桑野さんが気づき「いつもそんなことしてないじゃん」と。その場で笑いが絶えませんでした。そんな先輩の顔をみる一面もあるのだなあと思いました。

(ひとは工房 古玉 麻友美)

の

日

# 「気長に」

作業所に所属の河野崇史さんですが、約一年前に(赤信号で停車した)公用車からの飛び出しが見られて以降、できていた活動ができなくなりました。急な変化に原因が分からず、どのような支援を行えばいいのか迷う日々が続く。その中で「本人に無理のないように気長に付き合ってください。」とお母さんから話がありました。それからは河野さんのペースでできるよう、静かな環境で活動、昼食を別室で、声掛けしすぎないなどの支援を行い、今ではよりパワフルとなり、毎日元気な声が聞かれるようになっていきました。

「これから一糸縷にゆっくりに歩いていこーね!河野さん!」 (ひとは作業所 越智 修)

マ

# 特別寄稿

「文ちゃん」は少年のように心から楽しむ。だから一緒にいて私達も心から笑えて楽しい。

そんな文ちゃんに一度だけ厳しく叱られたことがある。年上3人が年下のいとこ達と遊ぶのが面倒で逃げ回った時のことだ。文ちゃんに見つかった私達3人は、年下の子達を大切にできなかったことをこっぴどく叱られた。その時、一番上である私のしんどさを聴いてくれたのもまた文ちゃんだった。あの時の少し困ったような顔と優しい眼差しは今でも私の中にある。

文ちゃん、ありがとう!!大好きだよ。(敬子[姪])

「もう〜、寺尾さん。」

「反抗期終われんじやないですか」  
「また宇治にこんなこと言われた」と暗い道。  
肩をおとして帰ってきたよ。」と順子さん。その日、私は寺尾さんに怒られました。真赤な顔で怒られたこと何度も。寺尾さんはすごい。すごいけど、私にも私なりの思いがあるんです!と怒られても怒られても「でも〜」と泣いてました。あんなに怒ってたのに、すぐに普通に話しかけてくる寺尾さんに、「もう〜私はまだそんな気分になれません!」と思ったり。反抗期ですね。きっと、ずと反抗期のままなのに、寺尾さんは出会った頃と変わらず、「宇治ちゃん、ちょっと来てみい。」と夢を語り、思いを伝え続けてくれました。 (元スタッフ 宇治 千恵子)

\*初めて借りた本「若荷村見聞記」読み返しています\*

# 編集後記

ひとはは「ひとりぼっちをなくそう」から始まる気がする。障害のあるなしではなく人間関係に渡り「これからどうするか」と悩む人々。公的支援も何もない中で「来る人拒否」だった。みんなの行事を企画したのもその中で「ひとりじゃない」と呼びかけた。そこの朝最後に、テーブルに残されたメモ。「ソーシャルワークとは?」文向さん 私は「75000」だと思ってる。多くの75000はひとはの大切な財産。残された私財がいつも「ほっとけん」と思えるのか。(寺尾 順子)